

## 悩める時代の

### 母親たちを支援するとは(3)

田代 和美

二、三月号で母親を支援することについて拙い文章を書いた後も、様々な事が生じ続けている。

自分の文章を読み返すと、私は甘いのだろうかと思う。そして子育て支援の取り組みでかわっている幼稚園の園長先生から、今までだったら「子どもの親」としてかわってればよかったのが、「個としての母親自身」をまず受け止めなくては

ならないのが現状であり、こちらの前提を現実とは遙かに越えているという旨の話が聞かされるとさらにその思いは募る。

自分の子どもの保育園の母親たちは結構仲がよいと思っていた。ところがここに来て、母親同士のトラブルが父母会運営にまで波及してしまう事態が生じた。元はと言えば、子ども同士の問題を

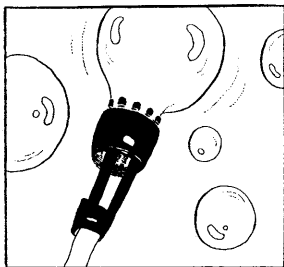
解決したいと願った一方の親が、相手の親と親しくなって話を色々聞いてあげることで相手の親のストレスが軽くなれば、その子どもが安定する。その結果、自分の子どもが危害を加えられなくなる。そう考えたことから始まったようだ。家族ぐるみでつきあうようになる中で、急に距離が縮まり、家庭内のプライベートなことまで話す間柄になり、その中の些細な一言が、顔も見たくなければ一緒に活動もしたくないという決定的な決裂に至ってしまったらしい。

それからしばらくたって、クラスの子が風邪をこじらせて入院してしまったことを家で子どもから聞いた。こういうことに私は弱い。近くの大学病院に入院しているとすれば、二十四時間親が付き添うか完全看護かのどちらかを選択させられる。完全看護といっても、実際には手の足りない病棟でベッドに縛り付けられる子どもの姿を何度

も目にしている。想像しなければよいのだが、どうしても頭に浮かんできてしまっても立ってもいられなくなる。下の子どももいるのでどうしているのだろうかこれまた気にかけて仕方がない。だからといって私が身代わりになれるわけではないし、冷静な目でみれば無意味なことに私は捉えられてしまう。落ち着かない気持ちで過ごした翌日の夜、結局電話を入れた。父親が出て、なんと兄弟そろって入院してしまったという。上の子どもの方はもう元気で退院出来そうだということだった。少々ほっとはするものの、でも一人が退院して一人が入院しているというのは考えてみれば大変なことだ。気が張って疲れも感じずにいるのだろうが、でもきついだろうなあと感じてしまう。私は状況を伝えるためにクラスの母親に電話を入れてしまった。そして思わぬ反応に出会った。「何をすればいいのか」という困惑と「あち

らのご家庭にも色々ご事情があるでしょうし」という距離感だった。どこかに気持ちを共有出来るという私の甘い期待があったことが露呈される。それにもかかわらず私は翌朝、コンビニで買った数種類のドリンク剤と子ども向けの遊具とともに身近にも手伝えることは手伝えたいと思っている仲間がいるんだよという趣旨のメモをその家の玄関においた。帰る道すがら、電話口の母親と同じように感じるのだとしたら、迷惑な思いをするのかもしれない。そういえば私だって彼女とどれだけ言葉を交わしたことがあるのだろうか……と不安な思いを抱えつつ、それを振り切るように自転車をこいだ。こういうことで不安になったのは初めてだった。その夜、今まで聞いたことのない明るい声で「ありがとう。すっごくうれしかった」と彼女から電話が来た。ちょうどその日に二人そろって退院出来たのだという。

これらのでき事から引きずっていることがある。自分の母親たちとのかわりかたである。なんでこうもお節介なのだろうか。しかも距離を置きたがる親たちとの間で。相手は本当にありがとうと思っただろうか。今回は声からしてそう思えた。でも相手が余計なことをして思っただら、私の行為は押しつけがましき以外の何者でもない。今回は現にそれを不安に思いもした。自己満足のためではないのかという問いも何度も押し寄せた。そうやって自分の内にベクトルを向けて考え続けると、どうやってかわつたらいいのか分からないようになってしま、結果として



距離を置くのが一番無難なのということになってしまう。先にあげた母親同士のトラブルや、電話口で聞いた反応と同じところに行き着いてしま

う。他者との遠い距離。でもこの距離を維持しようとする、最初に挙げたような親同士のトラブルを誘発するのだと思う。距離を保てなくなった時に密着するという反対の極に一つ飛びに移ってしまうのだと思う。挨拶を交わす程度の距離か全面的に密着してしまう距離か、一〇〇か〇かという距離感。自分の身を自分で守るか、守ってくれる人に全面的に依存するか、この二つの距離でしか関係が成立しにくい。それが今の子育てをしている親たちのシンドサの底辺に流れているように感じる。人に迷惑をかけてはいけない。そう言われて育ってきた。多分学校でも、職場でも自分ひとりの力で頑張ってきたのだろう。自分で自分の身を守ろうとするその体勢のまま子どもを育て

ているのだとしたら、子ども共々閉鎖された世界で生きていくことになってしまう。

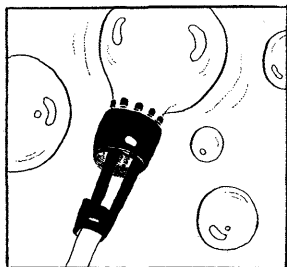
こういう回路をうろろろと歩いていると、とてもなく辛くなってくる。前回書いた自分自身にだけ意識が向いていて関係性が見えてこない状況に陥ってしまう。もつと素朴に描いてみよう。私が大変そうな人を見てかわってしまったのは、自分自身もそうしてもらってきたからだ。ただ素朴にそれだけのことなのだ。上の子どもが生まれてから隣近所の人たちに沢山助けってもらってきた。高熱をだしてどうしていいか分からない夜に隣のドアを叩いて助けを求めたこともある。その翌朝には温かいフレンチトーストを運んできてくれた。自分が忙しくて食事や離乳食を作ることもままならなかった時に「豚汁いっぱい作っちゃったから」とお鍋ごと運んでくれるような人たちがいた。どうも食べ物のことばかりが思い出されるよ

うだが、決してそうではない。相手にとつては何ということもない行為だったのだろうと今となっては思える一つひとつのことが私にはこの上なくありがたかった。その人たちに何かお返しをしたのかというとそれは多分してはいない。貸し借り関係や支配関係をつくるための行為ではなかったからだ（と私が感じたからだ）。他の人にそのお返しをするという目的な部分もないとは言えないが、そうしてもらってきたからそうしてしまうという身体に染みついた感覚で私は動いてしまうのだと思う。

自分の内にベクトルを向け続けた時の自己満足ではないのかという問いや閉塞感と素朴な自分の感覚とのギャップ。これらを抱えた中で引きつけられていったのは鷺田清和の著作だった。著作内での文脈とは別の文脈に置きかえてしまうことを恐縮しつつ、いくつか引用してみたい。

「他人へのケアといういとなみは、まさにこのように意味の外でおこなわれるものであるはずだ。ある効果を求めてなされるのではなく、『なんのために？』という問いが失効するところで、ケアはなされる。こういうひとだから、あるいはこういう目的や必要があつて、といった条件付きで世話をしてもらうのではなく、条件なしに、あなたがいるからという、ただそれだけの理由で享ける世話、それがケアなのではないだろうか。」

（『聴く』ことの力』TBSブリタニカ）。初めての子育てで大変だった時に周りの人たちから差し伸べられた手によって、私は人から「享け



る」ことのできる自分という久しく忘れていた自分を発見したのかもしれない。「生まれ落ちたらすぐに他者への全面的な依存関係に入る」ことが「享ける」ことの典型例として描かれているのだが、親からすれば子育ては要介護5の状態にある人間を世話することから始まる。しかもかつて「享けた」時代以後の長い期間、自分で自分の身を守る体勢で生きてきた人がだ。ケア関係に入つた人は「享ける」ことを充分経験する必要があるのだと思う。子どもが存分に「享ける」ことができるためにも。

でも「享ける」行為を巡る大人の人間関係はどう考えたらいいのだろうか。いくつか考える発端を示してくれる文章を引用したい。「わたしがわたしじしんであるためには、彼（あるいは彼女）が必要である、他のひとが彼（あるいは彼女）じしんであるためにはどうしてもわたしが必要とな

る、わたしと彼（あるいは彼女）とのあいだのそのような関係は、これから達成されるべき関係であるというよりもむしろ、わたしがへわたしじしんであるために、いつもすでに前提されている関係であるのではないだろうか。」「じぶんから他者を見るのではなく、自分を見る視線を他者のほうに設定する。『じぶんが』と考えるのではなく、他人のための、他人にとつてのじぶんというものを考えるということとは、それほどかんたんなことではないのだ。』（『じぶん・この不思議な存在』講談社現代新書）。」「ひとはたしかに独りでは生きていけない。生まれ落ちても独りでは飲み食いすらできないし、死期が近づいても独りで棺桶に入ることもできない。ひとはささえあひながらしか生きていけない。だが、そのささえあひというものがとにかくむずかしい。ささえられるということともたれるということの違いを知るのがと

くにむずかしい。もたれあわないささえあいというものを求めて、独りもがき苦しんでいるひとがこの世には存外多いのではないか。」（『まなざしの記憶―だれかの傍らで』TBSブリタニカ）。

簡単に答はでない。でも関係なきところに自分などというものは存在しない。自分で自分の身を守ろうとすることからくる閉塞感、窮屈だし退屈だ。窮屈や退屈ではなく子どもと過ごす日々を楽しむたいから関係性にこだわり続けていきたいが、先は遠い。

子育てにかかわる親以外の人間が段々と公的な立場の人になっていきつつある。園での子育て支援も何らかの資格を持った人がかかわる方向になりそうだ。家族か専門家か。子育てにかかわる人を二極分化して狭めてしまうのではなく、生活という日々の営みの中でできることはないのだろうか。その途を拓いていくことが子どもの育ちに

とっては大切なことに思える。時代に逆行しているのだろうし、やはり私は甘いのだろうとも思うが、それを貫いていきたいと今は思う。

（お茶の水女子大学）

